

# 児童創出評価基準表にもとづく評価活動を支援する学習環境開発と 総合的な学習の時間の授業実践に関する研究

授業実践者 富長 實

## 1 学年

小学校 第5・6学年

## 2 単元名

見つめよう 私たちの町

## 3 単元の目標

- ・児童が生活している町や隣接する町に関心を持ち、自ら地域に関わる課題を見つけ、テーマを設定する。(問題設定)
- ・児童が目標を持って調査計画を立て、調査・追究をする。(計画追究)
- ・児童が収集した情報をまとめ、調査結果を発表する。(まとめ)
- ・各学習段階の学習過程で、児童が評価規準と評価基準表を作成し、自らの学習を評価する。

## 4 単元の構想

### 4. 1 単元設定の理由

実践校のある町は、三原郡の中央に位置している。住民は農業関係に従事しながら他の職業に就いている兼業農家が多く、町は温和な気候を生かした多毛作地帯である。玉葱・レタス・白菜等の野菜は特産物となっている。児童は、これらの特産物について、1・2年生での生活科や3・4年生での総合的な学習の時間で学習してきた。しかし、隣接する他の町の特産物や特徴については、よく知らない。

5・6年生の総合的な学習の時間では、児童が住む三原町とかかわりの深い隣の町まで活動範囲を広げることで町を見直し、町の特色や違いを学習させたい。そして、町を支え働く人や地域の歴史に触れることで、児童が住む三原町や隣接する町の再発見をさせていきたい。平成17年1月の4町合併を目前にし、児童が生活する町や誕生する新しい市の特徴や問題を認識することは、今後一市民として町を支える子どもたちにとって有益である。

### 4. 2 児童の実態と単元の構想

総合的な学習の時間は、生きる力を育むために、極めて重要な役割を担うものとして創設された。総合的な学習の時間では、自ら課題を見付け、自らの方法で追究し、試行錯誤しながら解決していく活動を通して、主体的・創造的に生きていく力を身に付けることが求められている。

授業実践を行う小学校は、全校生39名の小規模な学校であり、5・6学年の複式学級である。実践校では、何事においても協力してやり遂げることを重視した取り組みが行われてきた。総合的な学習の時間においては、少人数の学級ということもあり学級で1つのテーマを設定し、協力して調べる活動が主であった。有能な児童がリーダーシップを発揮し、その他の児童は従っていけばよいという雰囲気があり、他者に頼り主体的に学習を展開できない児童も見られる。

総合的な学習の時間では、児童が自らの学習を振り返り、主体的に判断し、改善・修正を加えながら学習を展開していく。総合的な学習の時間のねらいから、主体的とは、自らの考えをもとに自ら判

断し、自らの行動を決定することであると捉えることができる。自ら判断するためには、判断するための基準が必要である。自らの基準によって判断する経験を通して、自らの行動に価値を見出し、自ら改善する主体的な活動ができる。

また、自己評価は、学習の過程で自らの学びを振り返る活動であり、どんなことに気づき、どのように考えを深めたかといった自らの学びを確かめることである。また、追究の内容や方法、見通し等について吟味し、改善していくために行う。それは、生涯にわたって「生きる力」の基盤となる。自らの学習を自己評価するためには、具体的に何について振り返るかという拠り所となる基準が必要である。

近年、自己評価や相互評価といった児童を主体に考えた評価を位置付けた学習活動が展開されている。しかし、評価規準や評価基準表を児童自身が創出し、その基準にもとづいて自らの学習活動を振り返り、主体的に判断し、改善・修正する授業実践は少ない。

学校現場では、これまで教師による評価が中心となっていた。また、教師が評価基準表を作成し児童に与える場合もある。これは、児童に対して、教師が与えた基準の達成を求めていることになる。自らの行動に価値を見出し、自らの行動を価値あるものとして捉えることは難しい。

本実践では、教師の支援のもとに、児童が評価規準や評価基準表を創出し、自らの学習活動を振り返り、主体的に学習を改善・修正していく授業を構成する。

そのために、次の2つの視点から授業支援を行う。

#### ① 授業の流れの工夫

評価規準や評価基準表の創出方法を工夫し、授業展開に組み入れる。

#### ② 学習支援システムの開発

児童が評価基準表を創出することや評価基準表にもとづいた評価活動には教師の支援が必要であるため、学習支援システムの開発を行う。

自己評価を行い、自分の成長を捉えるためには、学習における目標を明確にしておかなければならない。また、児童自身が自分の目標に対してどれだけの確に自分を捉えられるかが自己評価の課題である。そこで、児童が学習の目標として、評価規準と評価基準表を設定し、それを利用した自己評価を児童自身が行う。また、学習過程において自分の学習状況を的確に捉え、自己を成長させるために、教師による評価、児童同士による相互評価を行う。

### 4. 3 評価規準と評価基準表創出の流れ

図4-1に問題設定の学習段階での評価規準と評価基準表創出の流れを示す。図4-1において、まず、見学を通して学習者が抱いた疑問やテーマを発表する。ここでは、見学を通してどんな疑問を抱いたのか、どのようにテーマに結びつけていったのかをグループの中で発表する。他の児童の発表を聞いて、自分とは違った見方や考えを探するという観点で聞くように、教師は児童に指示しておく。自分にはないよいところや自分の学習に取り入れたいことを見つけさせる。

次に、他児童の発表を聞いて、自分とは違うと感じた見方や考え、自分の学習に取り入れたいと思ったことを発表し、学級で話し合う。自分の学習の目標となり、評価規準のもとになるものである。教師は、児童の発表を、「疑問」や「テーマ」などに分類する。その後、児童が目指す学習の目標である評価規準を設定する。児童と教師の対話による確認・修正を行い、児童が納得のもとに評価規準を決定する。

前時に設定した評価規準や教師が分類した内容などをもとに、児童が評価基準表を設定する。その後、児童と教師の対話による確認・修正を行い、児童が納得のもとに評価基準表を決定する。

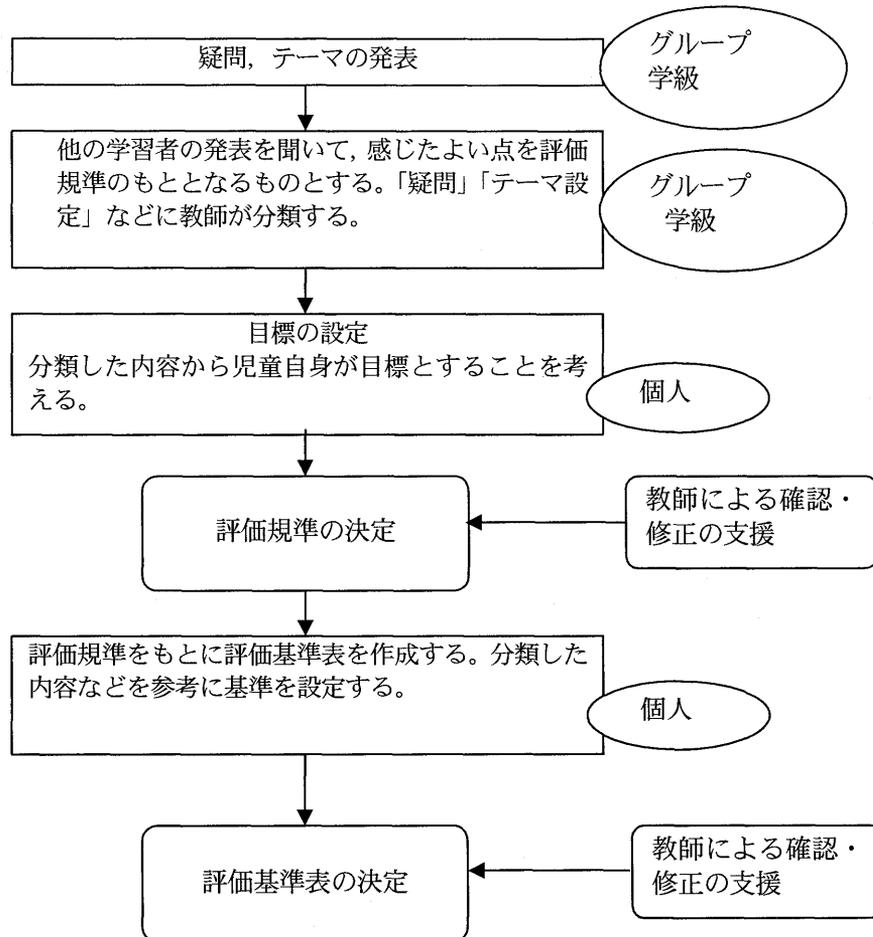


図4-1 評価規準と評価基準表の創出の流れ（問題設定）

図4-1の評価規準と評価基準表の創出の流れにもとづいて次のような時間配分で授業（評価規準と評価基準表創出の部分）を計画する。

①疑問やテーマの発表 ……（1時間）

学習の過程で自分が抱いた疑問や考えたテーマを児童が発表する。

②評価規準の設定 ……（1時間）

グループや学級で話し合い、出てきた意見を教師が分類する。教師が分類した内容をもとに、児童が学習の目標を決め、評価規準を設定する。児童と教師の対話による確認・修正を行い、児童が納得のもとに評価規準を決定する。

③評価基準表の設定 ……（1時間）

教師が分類した内容をもとに、児童が評価基準表を設定する。その後、児童と教師の対話による確認・修正を行い、児童が納得のもとに評価基準表を決定する。

※ 計画追究では、①の部分が「目的」、「調査方法」など、まとめの学習段階では、「まとめ方」、「発表の仕方」になる。

学級やグループの話し合いを通して気づいたこと・検討したことを評価規準や評価基準表の素案とする。評価規準と評価基準表の作成にあたって、各児童にとって評価規準の達成が不可能なものや容易なものにならないように教師が助言する。

評価規準と評価基準表の創出部分（問題設定）の授業計画を表4-1に示す。実際の授業計画の第1次の第9時、10時、11時の部分である。

表4-1 評価規準と評価基準表の創出部分の授業計画（問題設定）

時	学習活動	教師の支援	学習形態
9	1.前時の学習を想起する。 ○前時に作成した学習ファイルを参考に話し合いの準備をする。	・児童に発表の準備や練習をさせておく。	個人
	疑問，テーマの発表		学級グループ
10	2.グループ（学級）で話し合う。 ○見学後に抱いた疑問，調べてみたいこと，考えた学習テーマについて一人一人発表する。 ・抱いた疑問点について説明する。 ・その疑問点の中から調べてみたいことやテーマを考えるに至った考えを説明する。 ○友達の発表を聞いて，不明な点を質問したり，自分の考えと違うところについて発表する。	以下の点に留意しながら発表を聞くよう指示する。 ・自分とは違った見方や考えを探すという観点で友達の意見を聞く ・発表を通して，自分とは違った見方や考えに触れさせる。 ・いくつかある疑問をどのように検討し，取りあげてみようと思ったのか，自分の考えと比べながら聞く。 ・調べる目的がはっきりしているか	学級グループ
	「評価規準」の設定		個人
11	3.前時の話し合いで，自分にはない友達の見方や考え方について各自発表する。 それぞれの意見の中から課題の設定に関するものについて教師が分類する。 「疑問」「テーマ設定」などそれぞれの内容を「評価規準」のものになるものとする。 4.分類したものの中から，自分が目標とすることを選び，自分の学習目標とし，それを「評価規準」に設定する。	・自分にも取り入れたいところを見つけさせる。 ・グループで話し合った内容を学級全体に紹介させる。 ・「評価規準」の作成手順を説明。 ・教師の支援のもと，「評価規準」を児童の納得の上決定する。	個人
	「評価基準表」の作成		個人
	5.前時に設定した「評価規準」をもとに「評価基準表」を作成する。 ・前時で教師が分類した内容などを参考に基準を設定する。  ・作成した「評価規準」「評価基準表」を学習ファイルに入力する。	・「評価基準表」の作成手順を説明する。 ・児童が目指す目標（評価規準）をもとに，「評価基準表」の作成手順に従って，作成させる。 ・教師の支援のもと，「評価基準表」を児童の納得の上決定する。	

#### 4. 4 学習の流れ

正司和彦[2004]は，社会的構成主義にもとづいたコミュニケーションによる学習活動の流れを次のように示している。

- ① 学習の目的や動機を見出し，学習共同体に参加する。
- ② 新しい体験をしたり新しい知識にふれたりする。
- ③ 言語や文化的道具を媒介としたコミュニケーションを行い，知の獲得と理解の深化を行う。
- ④ 学習共同体において知識や考えを創りだし，共有化を行う。

⑤ 自分自身の考えや知識を再吟味し、学習を振り返り自己を認識する。

児童は、学習共同体の中でコミュニケーションを行いながら知識を獲得し、知を組み立てていく。

この学習活動の流れをもとに、総合的な学習の時間における問題設定（出会い）、計画追究、まとめの学習段階の学習の流れを創る。以下に各学習段階の学習の流れを示す。

### (1) 問題設定（出会い）の学習の流れ

児童は、大テーマ「見つめよう 私たちの町」を知り、各児童の興味や関心にもとづいた見学・体験を行う。児童は、学習の対象と出会い、学習の対象に対して、疑問や問題を認識する。次に、学級で言語によるコミュニケーション活動を行う。児童は、テーマ設定に関する評価規準や評価基準表の素案を知る。児童自身が学習を進展させ、主体的な判断ができるように評価規準と評価基準表を児童が創出する。次に、児童は、評価規準と評価基準表にもとづいて学習テーマを設定する。問題設定の学習段階の終わりに、自己評価、児童同士による相互評価、教師による教師評価を行う。

図4-2に問題設定（出会い）の学習の流れを示す。

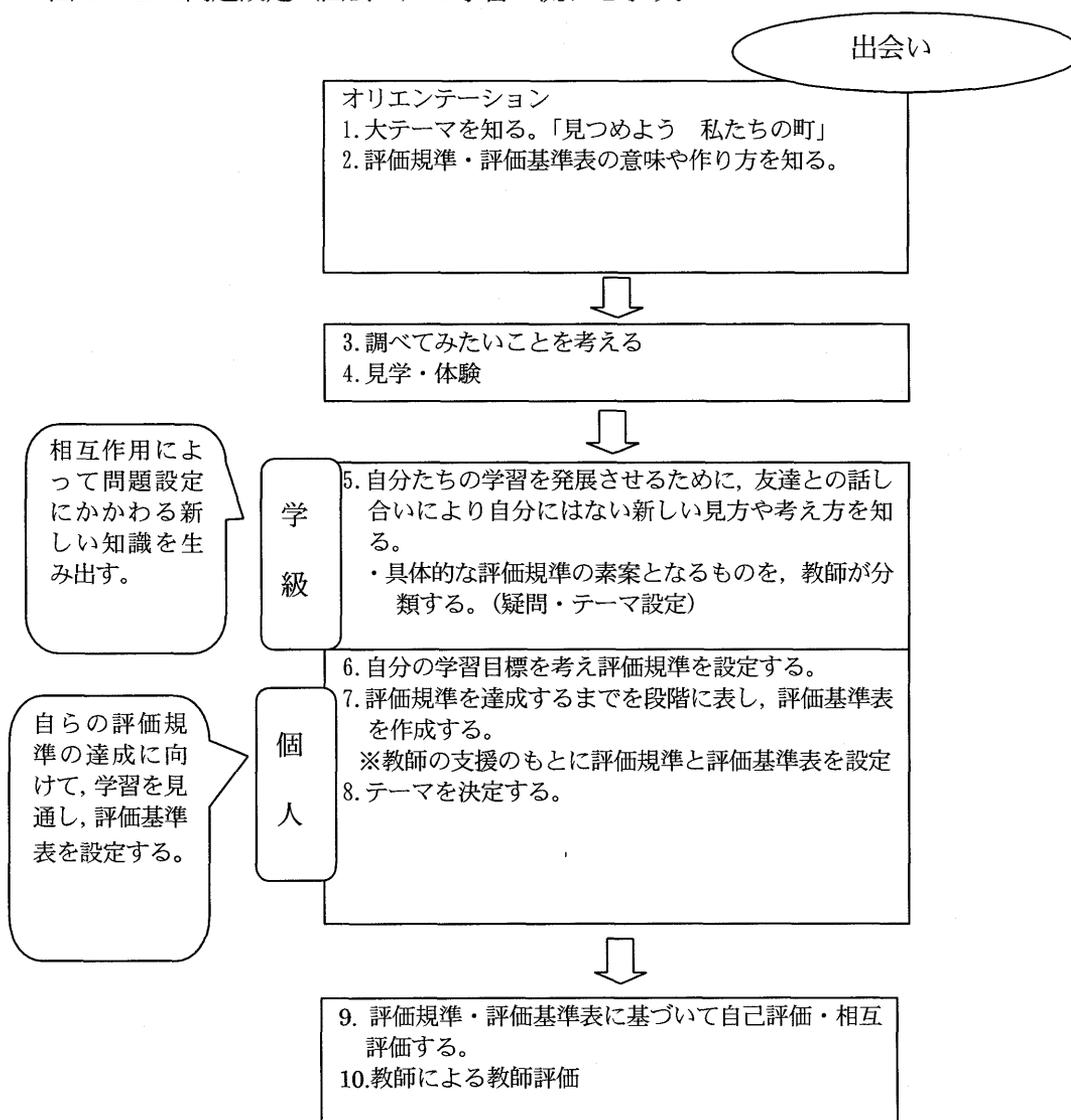


図4-2 問題設定（出会い）の学習の流れ

問題設定（出会い）の学習段階において、次の点に留意する。

- ・見学体験を通して見つけた疑問について、追究可能かどうかを検討する。

- ・問題を構造的にとらえやすくするマップなどを活用する。
- ・各児童の学習状況，自己評価，相互評価，教師評価を公開することを前提に行うことを確認しておく。

## (2) 計画追究の学習の流れ

児童が自分のテーマを追究する方法を考える。次に，学級で言語によるコミュニケーション活動を行う。児童は，調査方法・調査計画・追究に関する評価規準や評価基準表の素案を知る。次に，児童自身が学習を進展させ，主体的な判断ができるように評価規準と評価基準表を児童が創出する。次に，児童は，自分の評価規準と評価基準表にもとづいて，追究計画を立て，調査活動を行う。計画追究の学習段階の終わりに，自己評価，児童同士による相互評価，教師による教師評価を行う。

図4-3に計画追究の学習の流れを示す。

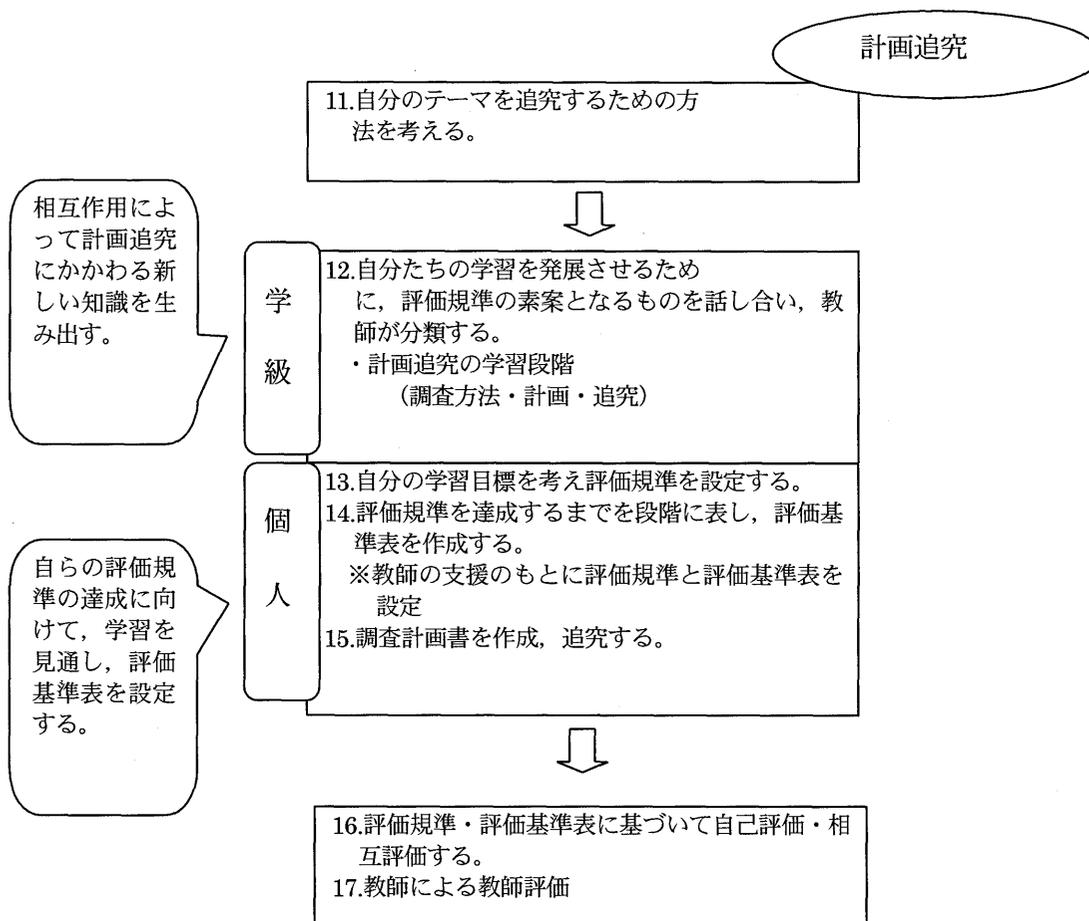


図4-3 計画追究の学習の流れ

計画追究の学習段階において，次の点に留意する。

- ・自分が選んだ調査方法について，適切かどうかを検討し，調査計画を作成する。
- ・調査の目的を明確にする。
- ・インタビューの練習を各グループで事前にする。
- ・各児童の学習状況，自己評価，相互評価，教師評価を公開することを前提に行うことを確認する。

## (3) まとめ学習の流れ

児童は，学習してきた内容のまとめ方を考える。次に，自分たちの学習を進展させるために，友達との話し合いにより評価規準の素案となるものを話し合い，教師が分類する。次に，学級やグループ

で言語によるコミュニケーション活動を行う。児童は、情報選択・まとめの構成・発表に関する評価規準や評価基準表の素案を知る。次に、まとめの段階の評価規準と評価基準表を決定する。

児童は評価規準と評価基準表にもとづいて、学習内容をまとめ、発表する。まとめの学習段階の終わりに、自己評価、児童同士による相互評価、教師による教師評価を行う。授業の終わりに、学習全体を振り返って、感想を書く。

図4-4にまとめの学習の流れを示す。

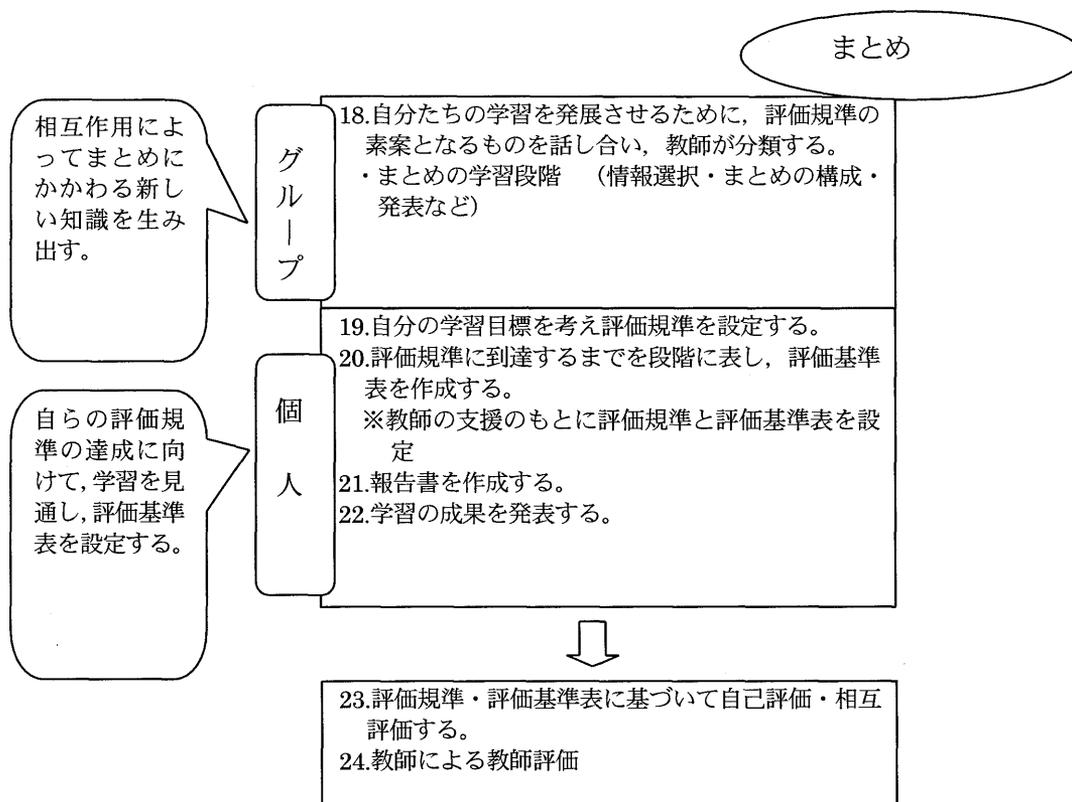


図4-4 まとめ学習の流れ

まとめの学習段階においては、次の点に留意する。

- ・ 学習全体を振り返り、活動の内容や結果を整理し、成果をまとめる。
- ・ 成果の発表会を計画する。

## 5 授業計画

第4章の学習の流れにもとづいて作成した授業計画を、問題設定の学習段階、計画追究の学習段階、まとめの学習段階ごとに示す。

### ①第1次 問題設定（出会い）の学習段階

はじめにオリエンテーションを行い学習の流れや評価規準と評価基準表について説明する。第1次では、児童が考えた見学や体験してみたいこと、調べてみたいことについて学級で話し合い具体的な見学場所を決め、見学をする。見学後に各児童が抱いた疑問をもとに学級での話し合いを行い、児童が今回の学習で追究しようとすることを決める。児童の追究しようすることを考慮し、児童と教師の対話を経てグループ編成を行う。

学級で、各児童が抱いた疑問、調べてみたいこと、考えた学習テーマについて発表し、各児童の評価規準の素案となる学習の目標について話し合う。学級の話し合いで出された意見を「疑問」「テ

ーマ」などに教師が分類する。分類された内容をもとに、児童が問題設定に関わる評価規準と評価基準表を作成する。その後、各児童が学習テーマを決定する。学習段階の終わりに自己評価、児童同士による相互評価、教師による教師評価を行う。

問題設定（出会い）の学習段階の授業計画を表5-1に示す。

表5-1 問題設定（出会い）の学習段階の授業計画（13時間）

次	時	学習活動	教師の支援
第 一 次 （ 出 会 い ）	1 2	○ オリエンテーションを行う。 評価規準・評価基準表の意味や作り方を知る。	・単元の流れについて説明する。 ・評価規準や評価基準表の資料を配布し、説明する。
	3	○ 見学・体験してみたいこと、調べてみたいことを学級で話し合う。	・授業前に自分の考えをまとめさせておく。 ・実現できそうもないことや、思いつきで考えたことも含めて話し合わせる。 ・思いつかない児童には教師が用意した写真や資料で紹介する。
	4 5 6 7	○ 前時に提案された施設や場所を見学する。  ○ 見学の中で発見したことや疑問に思ったことを記録する。	・事前に計画を立てさせる。 ・そこで働く人やその場所で生活している人と直接会って話ができるように事前に交渉しておく。 ・全員が見学・体験場所に行けるようにする。 ・各自に見学メモを持たせる。
	8	○ 見学・体験を通して抱いた疑問をもとに、さらに調べてみたいことを整理する。  ○ ワークシート、学習ファイルに入力する。	・さらに調べてみたいことが具体的に見つからないでいる児童に対しては、見学メモと一緒に見直すなど言葉がけやアドバイスをする。 ・掲示板のコミュニケーション機能を利用し、相互にアドバイスし合う。
	9	○ グループ（学級）で話し合う。 ・ 自分の調べてみたいこと ・ 疑問点 ・ 調べてみたい理由 ○ 課題設定の仕方に関わる評価規準の素案について話し合う。	・自分とは違った見方や考えを探するという観点で友達の意見を聞くように指示する。 ・自分にも取り入れたいところを見つけさせる。 ・学級の話し合いで出てきた意見を「疑問」「テーマ」などに教師が分類する。
	10 11	○ 課題設定段階における評価規準と評価基準表を作成する。 ○ 学習ファイルに入力する。	・問題設定に関わる評価規準と評価基準表を設定させる。 ・評価規準と評価基準表の作成にあたって、言葉がけ等による支援を行い、児童の納得のもとに決定させる。
	12 13	○ テーマを設定する。 ○ 課題について、知っていることと知らないことを書き出し、学習ファイルに入力する。 ○ 自己評価、相互評価を行う。	・児童が抱いた疑問のもとにテーマを設定させる。追究可能かどうかについても検討させる。 ・学習ファイル閲覧機能を利用させる。 ・評価情報として教師による教師評価を行う。

## ②第2次 計画追究の学習段階

各児童が疑問を解決するための方法を考え、それにもとづいて計画し追究活動を行う学習段階で

ある。児童が考えた調査の方法を学級やグループで話し合い、自分とは違った考えや方法に気づかせる。学級の話し合いで出された意見を「調査方法」「計画」「追究」などに教師が分類する。分類した内容をもとに、計画追究の学習段階での学習の目標を児童が設定し、評価規準と評価基準表を作成する。計画追究の過程で、新たな疑問を抱き、主体的に調査計画を見直したり、改善・修正をし、自らの学習を発展させる。学習段階の終わりに自己評価、児童同士による相互評価、教師による教師評価を行う。

計画追究の学習段階の授業計画を表5-2に示す。

表5-2 計画追究の学習段階の授業計画（10時間）

次	時	学習活動	教師の支援
第二次 (計画追究)	1	○ 自分の問題を追究するための方法をいくつか考える。 ○ 学習ファイルに入力する。	・ ワークシートを用意し、具体的な方法を記入させる。
	2	○ グループや学級で話し合う。 ・ 目的 ・ 調査方法 ・ 予想される困難点 ・ 予想される結果 ○ 計画追究の仕方に関わる評価規準の素案を話し合う。	・ 自分とは違った追究の方法や考えを見つけるといった観点で友達の意見を聞くように指示する。 ・ 自分にも取り入れたいところを見つけさせる。 ・ 学級の話し合いで出てきた意見を「調査方法」「計画」「追究」などに教師が分類する。 ・ 調査の計画に変更がある場合は随時学習ファイルに入力させる。
	3 4	○ 計画追究段階における評価規準と評価基準表を作成する。 ○ 課題を追究する計画を立て、学習ファイルに入力する。	・ 話し合った考えを取り入れて、計画追究に関わる児童の評価規準と評価基準表を作成させる。
	5 6 7 8	○ 自分の立てた計画にもとづいて、追究活動を行う。 ・ 個人で ・ グループで ○ 随時、ワークシートや学習ファイルに記録する。	・ 調査活動をするときの注意点について、事前に指導しておく。 ・ 児童一人一人の追究活動を把握し、随時追究の支援をする。
	9 10	○ 結果の整理 ○ 自己評価、相互評価を行う。	・ 成果を学習ファイルに入力する。 ・ 学習ファイル閲覧機能を利用させる。 ・ 評価情報として教師による教師評価を行う。

### ③第3次 まとめの学習段階

児童が、今までの学習成果をまとめ、発表する学習段階である。事前に児童の考えをまとめさせておいて、グループや学級でまとめ方や発表の仕方について話し合う。話し合いを通して、自分と

は違った考えやまとめ方に気づかせる。そして、学級の話し合いで出された意見を「情報の選択」「まとめの構成」「発表」などに教師が分類する。

次に、まとめの学習段階での学習の目標を児童が設定し、評価規準と評価基準表を作成する。学習段階の終わりに自己評価、児童同士による相互評価、教師による教師評価を行う。

まとめの学習段階の授業計画を表5-3に示す。

表5-3 まとめ学習段階の授業計画（7時間）

次	時	学習活動	教師の支援
第三次 (まとめ)	1	○ グループや学級で話し合う。 ・ まとめ方 ・ 発表の仕方 ○ まとめに関わる評価規準の素案を話し合う。	・ 今までの学習成果を分かりやすくまとめ、発表するために気をつけることについて話し合わせる。 ・ 自分にも取り入れたいところを見つけさせる。 ・ 学級の話し合いで出てきた意見を「情報の選択」「まとめの構成」「発表」などに教師が分類する。
	2 3	○ 評価規準と評価基準表を作成する。 ○ 学習ファイルを入力する。	・ グループで話し合った考えを取り入れて、児童の評価規準と評価基準表を作成させる。 ・ まとめをワークシートに記入する。
	4 5	○ 報告書の作成 ○ 発表会を持ち、学習の成果を発表する。 ○ 自己評価、相互評価を行う	・ 今までの学習ファイルをもとに、研究テーマ、設定理由、追究で分かったこと、自分の考えなどをまとめさせる。 ・ 評価情報として教師による教師評価を行う。
	6 7	○ 単元を振り返り、感想や反省を書く。 ○ 次に個人テーマで追究する時に目標にしたい事を考える。	・ 今までの自己評価、友達や教師のアドバイス、自分の評価規準と評価基準表や修正の履歴を振り返らせる。 ・ 学習ファイル閲覧機能を利用させる。

※ 3学期の学習発表会で、地域の人たちに今回の学習成果を発表する場を設ける。

◆ 全授業時数（30時間）

第1次 問題設定の学習（13時間）

第2次 計画追究の学習（10時間）

第3次 まとめ学習（7時間）

6 学習支援システムの全体構成

学習情報をデータベースに蓄積し、児童が必要な情報を即座に閲覧できるようにするため、システム開発にあたっては、データベースソフトとWebページ専用ソフトを使用する。本研究で開発した学習支援システムの構造を図6-1に示す。児童が操作しやすいように、トップページから学習ファイルデータベースへのアクセスと会議室データベースにアクセスすることができるようにする。学習支

援システムには、次の機能を持たせる。

### ①学習情報入力・編集機能

問題解決に関わる情報の入力・編集が行える学習ファイル部分と評価規準と評価基準表の入力・編集ができる部分とで構成する。児童は、見学で得た情報や調査計画などの学習情報を学習ファイル部分に入力する。学習ファイルは、問題解決の過程（課題設定、計画追究、まとめ）ごとに配置する。また、評価規準と評価基準表の入力・編集が行えるようにする。

### ②コミュニケーション機能

児童が問題解決過程で行き詰ったときにアドバイスを受けたり、友達の気づきや考えを知ったりすることで自分の考えを確認・修正できるように電子掲示板を使ったコミュニケーション機能を設ける。

### ③閲覧機能

コミュニケーションを行うためには、他の児童の考えを知り、自分の考えについて再確認できる必要がある。そのために、他の児童の学習ファイルや評価規準・評価基準表を閲覧したり、自分の学習ファイルを自由に見ることができるようになる必要がある。そこで、閲覧機能を設ける。また、会議室の書き込み内容を見る場合、自分の目的によって探すことができるように、学習段階、キーワードで探すことができるようにする。

システム開発に使用するデータベースソフトは、Web 上から複数の同時アクセスが可能で、データの作成や閲覧、検索が行えること、カスタマイズが容易であることなどの条件を考慮し、ファイルメーカー Pro 6 Unlimited を使用する。Web ブラウザ間の通信を操作する CGI (Common Gateway Interface) 機能を持たせるための CDML (Claris Dynamic Markup Language) タグを容易に作成することができるという利点があることから、ホームページ Pro3 を使用し、開発する。

図6-2は、実践校の校内 LAN の構成を示したものである。各学年の教室や特別教室にもコンピュータが設置されているが、台数が各1台と少ないため、授業過程で学習情報の入出力や会議室への投稿・閲覧は、主にコンピュータ室で行う。

コンピュータ室のサーバーに学習ファイルデータベースと会議室データベースを用意する。学習ファイルデータベースは、学習過程における学習情報を蓄積する。また、会議室データベースは、掲示板への投稿やそれに対する返事を蓄積する。データ管理が容易にできるように1つのサーバーに学習ファイルデータベースと会議室データベースを設置する。

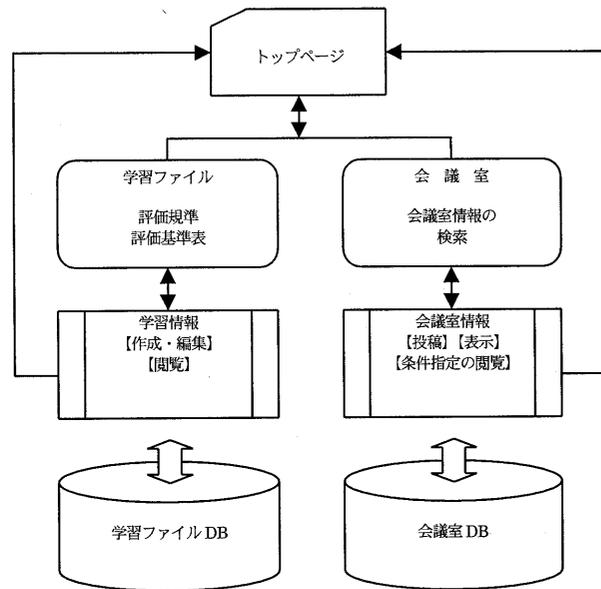


図6-1 学習支援システムの構造

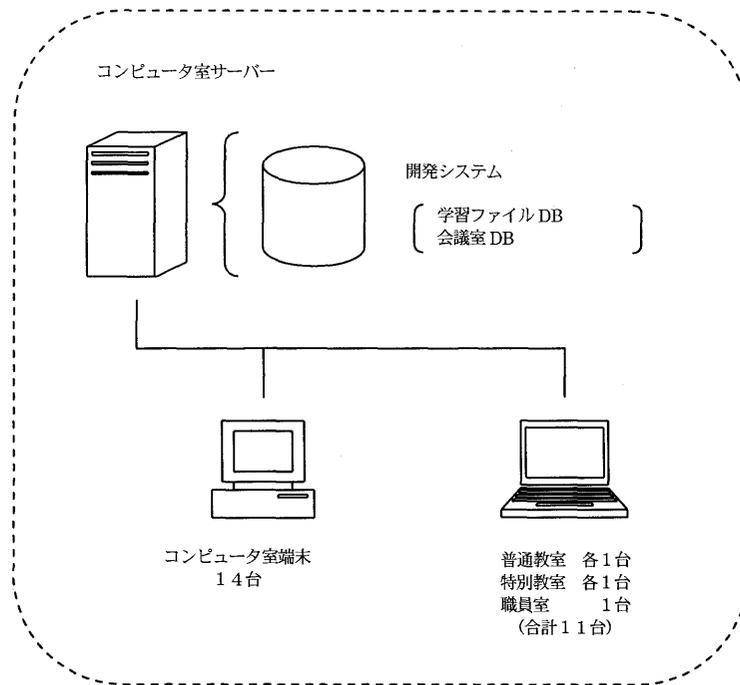


図6-2 実践校の校内LAN

## 7 授業実践

### ○第1次の学習活動

第1次は、問題設定(出会い)の学習段階である。各児童が考えた見学や体験してみたいこと、調べてみたいことについて学級で話し合い具体的な見学場所を決め、見学や調査を行った。その後、各児童が抱いた疑問をもとに学級全体での話し合い、各児童が今回の学習で追究しようとすることを決めた。話し合いをもとに、児童が問題設定に関わる評価規準・評価基準表を作成した。その後、各児童は学習テーマを決定した。

#### (1) オリエンテーション(第1時, 第2時)

総合的な学習の時間の最初に、2時間のオリエンテーションを行った。大テーマ「見つめよう私たちの町」を提案し、単元のおおまかな流れ、問題解決の各段階(問題設定、計画追究、まとめ)について説明した。

#### (2) 見学場所の決定(第3時)

児童があげた見学場所や調べたいことについて学級で検討した。検討する時に考慮することとして次の2点を教師から示した。

- ・ 2学期の総合的な学習の時間で、見学が可能かどうか。
- ・ 調査にすぐに行けるかどうか。

児童が、見学場所に電話で問い合わせた都合を聞いたり、継続して観察するのに時期は適切か、地理的に距離が離れていないかを考えて、場所を決定していった。見学は次の6つに決定した。

- ◆ 漁港
- ◆ 瓦産業文化センター
- ◆ しょう油工場
- ◆ 志知城, 叶堂城跡
- ◆ コンビニエンスストア
- ◆ 淡路人形浄瑠璃

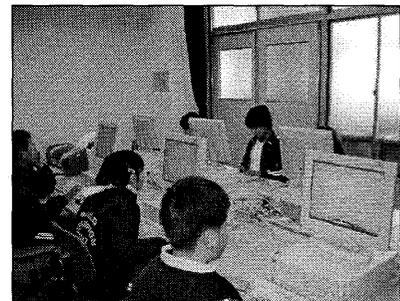


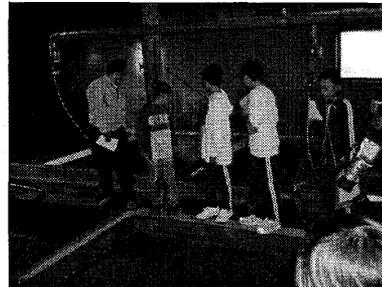
写真1 オリエンテーションの様子

(3) 見学 (第4時～第7時)

前時に決定した見学場所に、教師が電話で見学の依頼と日時の調整を行った。事前に、インタビューの仕方やマナーについて指導し、質問内容を考えさせた。見学にあたって、安全面に配慮するとともに、遠方への移動にはタクシーを手配した。



コンビニエンスストア



しょう油工場

写真2 見学の様子

(4) 評価規準と評価基準表の作成 (第9時～第11時)

見学を通して抱いた疑問をもとに児童と教師の対話を経て産業・歴史・生活のグループ分けを行った。第1グループは産業に関するグループで瓦産業としょう油づくり、第2グループは歴史に関するグループで叶堂城、志知城、人形浄瑠璃調べ、第3グループは、生活に関するグループで、コンビニエンスストア、苗字調べのグループとした。

評価規準と学習の目標をもとに児童が評価基準表を作成し、教師との対話を経て、各児童が評価基準表を決定した。児童が作成した評価基準表の例を図7-1に示す。各評価基準の〔 〕内に示されたものは、基準を満たすと考えた資料や事例を問題設定の学習段階の最終で児童が今までの学習を振り返って記入したものである。

評価基準4:	前もって資料を集めてテーマを設定する 〔集めた資料〕
評価基準3:	調べたいことにかんするマップを書く 〔マップをかいたかみ〕
評価基準2:	調べたい理由を考えて整理 〔理由を書いた紙〕
評価基準1:	調べたいことを3つぐらい見つける 〔調べたいことをかいたメモ〕

図7-1 評価基準表の例 (5年D児)

(5) テーマの決定と評価活動

(第12時, 第13時)

評価規準・評価基準表の決定後に今までの学習を整理し、今回の学習のテーマを児童が決定した。決定した各児童のテーマを表7-1に示す。

学習ファイル閲覧機能を利用し、各児童の評価基準表をもとに相互評価させる。図7-2は、D児の学習ファイルの評価部分である。アドバイスや評価を他の児童が学習ファイルに書き込んでいる。その後、教師によるアドバイスや評価を書き込んだ。D児に、教師から「M郡史や人形浄瑠璃の歴史の本があるから読んでみては」と紹介した。

表7-1 各児童のテーマ

グループ	テーマ
産業	しょう油の作り方の秘密 (5年A児)
	かわらの秘密 (5年B児)
	瓦の種類について (5年E児)
	しょう油について (6年J児)
歴史	人形浄瑠璃で演じられる題について (5年D児)
	志知城のひみつ (5年F児)
	人形浄瑠璃のおこり (6年I児)
	叶堂城のひみつ (6年H児)
生活	M郡のコンビニ (5年C児)
	M郡の苗字調べ (5年G児)
	コンビニのひみつ (6年K児)

D 児は自己評価の欄に、インターネットから資料を探し、評価基準4まで達成できたと書き込んでいる。他児童からの「色々な方法で調べたらいと思う。」というアドバイスを受け、第2次では、人形座で芝居を担当している人の話を聞いたり、関連した本から資料を探すことにした。

第2次の計画追究の学習段階では、調査の計画で図7-3のように書いている。友達の意見や教師のアドバイスを参考に調査を進めようとしていた。

学習を振り返って 自己評価しよう (出会い)	基準1がよくできたと思う 基準4までできた テーマを設定するのが難しかった 資料を集めた
友達から アドバイスや評価など ※コメントの後に(名前)を忘れないように!	もっと、人形のことを調べたらいと思う。(A児) いろいろな方法で調べたらいと思う。(H児)
先生から	淡路人形浄瑠璃って。歴史が古くて、有名なしいよ。 インターネットで資料を集めていましたね。 本も探してみるといいよ。 M部史なんかも詳しくでてるけど、ちょっと難しい。 読みやすい淡路人形芝居の本があるよ

図7-2 学習ファイルの入力例(5年D児)

①芝居をやっている人や人形芝居の事について詳しく知っている人に聞く ②インターネットや本で調べる  質問内容 いつごろからこの芝居をやっているか 話の内容は
---

図7-3 学習ファイルの入力例(5年D児)

### ○第2次の学習活動

第2次は、計画追究の学習段階である。各児童が問題を解決するための方法を考え、それにもとづいて計画し追究する活動である。ここでは、B児を例にあげる。

#### (1) 調査の計画(第1時)

児童が調査の目的を明確にし、調査計画を立てる。図7-4は、B児が授業前に考えていた調査の目的と調べる計画である。隣接する西淡町の瓦作りについて調べようと思ったことや調べてみたい内容が記入されていた。

○その理由や目的(明らかにしたいことなど)	三原町のとくさんぶつは、たすねまか、シラスで 南淡町は 浄瑠璃でいいけど、5年生で見学に行くから 西淡町のわう めいな物のかわらめつくり方をしらないのでしうべようと思いはした
○調べる計画	これから場所をまわていこうと思います。 それからそうすこし、かわらについて、しやていこうと 思います。 つくり方 ・まいいらう ・どこにはこはれるのか ・なぜ、西淡町かさかんなのか からは何しるいくらいい るのか

図7-4 B児の授業前の調査の目的と調べる計画

(2) 評価規準と評価基準表の作成 (第2時～第4時)

調査計画を立てた時点で、計画追究段階の評価規準・評価基準表の作成を行った。各評価基準の( )内に示されたものは、基準を満たすと考えた資料や事例を計画追究の学習段階の最終で児童が記入したものである。図7-5はB児の評価規準・評価基準表の例である。

評価規準:	最後まであきらめないように計画を立てる!
評価基準4:	最後まであきらめないように計画を立てる! (計画を立てたもの)
評価基準3:	自分が調べるので1番いい調べ方でやる! (見学やかわらのことをインターネットで調べたもの)
評価基準2:	かわらについて調べる方法をたくさん<3つ4つ>考える! (見つけて書いた紙)
評価基準1:	調査の目的を考える! (目的を書いたもの)

図7-5 評価規準・評価基準表の例(5年B児)

(3) 調査活動 (第5時～第8時)

B児は、瓦工場と連絡を取り、調査計画にもとづいて見学やインタビューをしていた。図7-6は、見学後のB児の学習ファイルである。このメモを見るとインタビューの結果や瓦の作り方が記されているとともに、見学後、瓦の形や日本以外の国の瓦について、新たな疑問を持ったことが分かる。

調査から分かったこと (事実)	瓦産業文化センターには、世界のかわらがあった。中国のかわらが、1番日本のかわらにていることが分かった。かわらの作り方や1日に作る枚数が分かった。五色や緑町からねんどを運んでいる。深路は瓦生産全国2位でした。
調査の結果について 考えたこと	かわらは、五色や緑町の土で瓦を作っているの。そこに、いい土があるんだと思った。深路には瓦生産全国2位でした。1位はどこなんだろう。深路には瓦作りで大切な土がある。なぜ、かわらはあんな形をしているの。世界の瓦はどうなっているの。

図7-6 学習ファイルの例(5年B児)

(4) 調査結果の整理と評価活動

(第9時～第10時)

見学後、集めた資料をまとめ、学習ファイルに入力した。

計画追究の学習段階の終わりに、学習ファイル閲覧機能を利用し、相互評価させた。アドバイスや評価を他の児童が書き込み、その後、教師によるアドバイスや評価を書き込んだ。(図7-7)

B児は、評価基準4まで達成できたと自らの追究活動を評価していた。教師の観察からも、計画にしたがって最後まで調査を行っていた。B児は評価基準4の「最後まであきらめないように計画を立てる」は、十分満たしていた。B児は、評価基準2がうまくできなかつたと自己評価している。瓦について調べる方法をもっとたくさん考えたいというものであった。B児の疑問は、瓦の原料になる土を採っている場所や世界の瓦の形へと発展していったことが分かる。

アドバイスしてほしいこと	・かわらのまをとっているところがあれば教えてください!(五色町か緑町どちらか)
学習を振り返って 自己評価しよう (計画追究)	今、評価基準4までできた。でも、基準2がうまくできなかった。もっと、しるべたいことをたくさん見つけたい。「なぜ、どうして?」と思ったことをたくさんかんがえらるるようになりたい。
友達から アドバイスや評価など	かわらをつくる土は山でとってるのかな?(亮也) 写真はいっぱいとれるといいな。(勇介) 丸新がわらの見学で、いっぱい聞くことを考えていたのがすごい。(特樹)
コメントの後に(名前)を忘れないように!	深路は、日本でも有名です。五づくりは、たくさんの工種がありましたね。日本で、瓦と一緒に普及したのは江戸時代からだと思うです。(盛真) それでは、深路など特別な産物に採られていたそうです。(盛真) 愛知県の三州瓦が日本で1番多く生産しているようです。(全体の40パーセント位) (盛真) 瓦の原料になる土は、五色町の海岸沿いにあると思います。 確かめてみるね。(盛真)

図7-7 B児の学習ファイルの記録

○第3次の学習活動

第3次では、今までの学習成果をまとめ、発表会に備える。事前にまとめ方や発表の仕方について考え、学級やグループでまとめ方や発表の仕方について話し合った。2学期の総合的な学習の時間のまとめとして、児童一人一人発表を行う発表会を開催する。

第3次の学習活動では生活グループの5年生G児を例にあげる。G児のテーマは、「三原郡の苗字調べ」である。町ごとに多い苗字を調べることを目的にし、電話帳を使って調査をしていた。

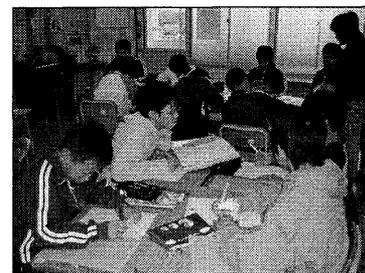


写真3 話し合いの様子

(1) 評価規準と評価基準表の作成 (第1時～第3時)

図7-8は、G児が考えた学習ファイルに記されたまとめの順番(発表する内容の順番)である。グループでの話し合いの後、④の結果のところまで5・6年生の苗字ランキングという内容が追加された。これは、5・6年生の苗字が全国的には、何位のランキングになるかというものである。発表を聞いている他の児童も大変興味を持った内容であった。

まとめの順番	① テーマ・・・苗字調べ ② なぜそのテーマにしたか ③ 調べた方法・・・電話帳 インターネット ④ 結果・・・三原町 西淡町 南淡町 緑町 全国の苗字ランキング 5・6年生の苗字ランキング ⑤ 感想・・・全国1位 佐藤さん 調べるのが大変だった
--------	--

図7-8 G児が考えたまとめの順番

(2) 発表用の掲示物の作成と評価活動

(第4時, 第5時)

評価基準表の作成の後、G児は発表用の掲示物を作成し、発表の練習をグループの中で行っていた。

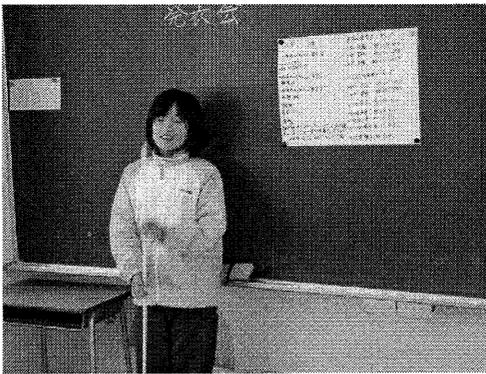


写真4 発表の様子

評価規準:	はっきりと大きな声で分かりやすく発表する
評価基準4:	はっきりと大きな声で分かりやすく発表する
評価基準3:	発表の練習をする (発表の順番どおり練習)
評価基準2:	5・6年生の苗字も発表 (考えたことのメモ)
評価基準1:	集めた資料の中から必要なものを選ぶ (インタビューのメモ、インターネットで調べた資料)

図7-9 評価規準・評価基準表の例(5年G児)

図7-5はG児の評価規準・評価基準表の例である。図7-10は、G児の学習ファイルに記された自己評価、相互評価、教師による評価である。

G児は、評価基準4までできたと自己評価している。発表を聞いた他の児童からは賞賛の書き込みがあった。

(3) 授業後の感想と反省

(第6時, 第7時)

図7-11は、G児の授業後の感想である。パソコンを使った授業への感想と今度は他の児童へのアドバイスを書いてあげたいと記している。

G児は、他の児童からのアドバイスが調査や発表資料を作る時に大変役に立ったと話していた。自分も役立つようなアドバイスをしてあげたいと感想を書いている。

学習全体を振り返って	自分では、頑張ったと思う。評価基準4までできました。
自己評価しよう	もっと苗字のことを知りたい。(どうやって苗字がきたのか)
がんばったところ	
改善したいことなど	苗字は面白かった。私が317位なんて知らなかった。(佐紀)
アドバイスや評価など	料上が、38位なんて知らなかった大変なのに、電話帳で、調べたりが、よかった。(加菜) 全国まで調べてすごい(;)賞賛がなかったから嬉しい(有記) 三原郡の多かった苗字を、全国ランキングでどれくらい見たい。(克也)
※コメントの後に(名前)を忘れないように!	
先生から	地域によって、多い名前があるんだね。 みんなの苗字の順位も発表して面白かったです。 大変だったと思いますが、よくがんばりました。(薫長) 大きな声で分かりやすく発表(評価基準4)できていました。(高典)

図7-10 G児の学習ファイル

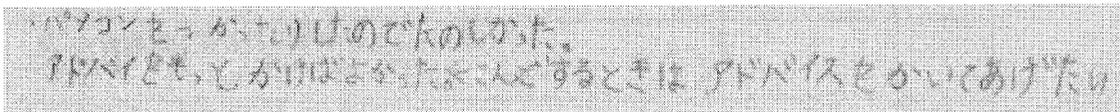


図7-11 G児の授業後の感想

8 授業実践の分析

児童が学習過程で新たな疑問を抱き、その解決に向けて主体的に学習を改善・修正し、自らの学習

を進展させるという観点から、児童の学習活動を分析する。主体的に学習を展開していた児童から K 児（6年生）と主体的に学習ができなかった児童から D 児（5年生）の学習活動を分析する。

### 8. 1 K児の学習活動

K 児は、「コンビニのひみつ」というテーマで学習を進めた。K 児は、同じグループの C 児や G 児とコンビニに出かけ店員にインタビューする計画を立てた。質問内容を話し合い、グループで検討していた。K 児は、24 時間営業しているコンビニエンスストア(コンビニ)に隣接しているアパートの住人から「夜、うるさい」という苦情があることを知り、アパートに住んでいる人にインタビューしていた。K 児のインタビューによると、「7月と8月の夜中に、コンビニの駐車場に若者が集まって騒いでいることがある。」というものであった。K 児は、学習ファイルに新たに出てきた疑問や調べてみたいこととして、図8-1のように記していた。

コンビニの裏のアパートに住んでいる人が、安心して眠れるようにするにはどうしたらいいか。

図8-1 K児の学習ファイル（新たな疑問）

K 児は、コンビニに事情を知ってもらい、夜騒ぐのは近所迷惑であることを注意してもらうように提案していた。

K 児が問題設定の段階において会議室や学習ファイル上で行ったコミュニケーション活動をまとめ、図8-2に示す。K 児は会議室でのコミュニケーション活動を通して、コンビニの種類やコンビニに対する認識を深めていった。そして、K 児は自分でテーマを決定することができた。

K 児は最初、調べたいことが、はっきりと掴めていなかった児童であるが、学習が進むにつれて、調べたい対象である「コンビニ」に関心が高まっていった。

K 児は、G 児から M 町のコンビニの数の情報を得た。5年生の A 児に対して、「ほっかほっか亭はコンビニではない。」という疑問を投げかけていた。A 児もコンビニに対する認識が違っていたことに気がついた。今回開発したシステムは、K 児と他の児童との相互作用を促す場となり、新しい知識を生み出すことにつながった。

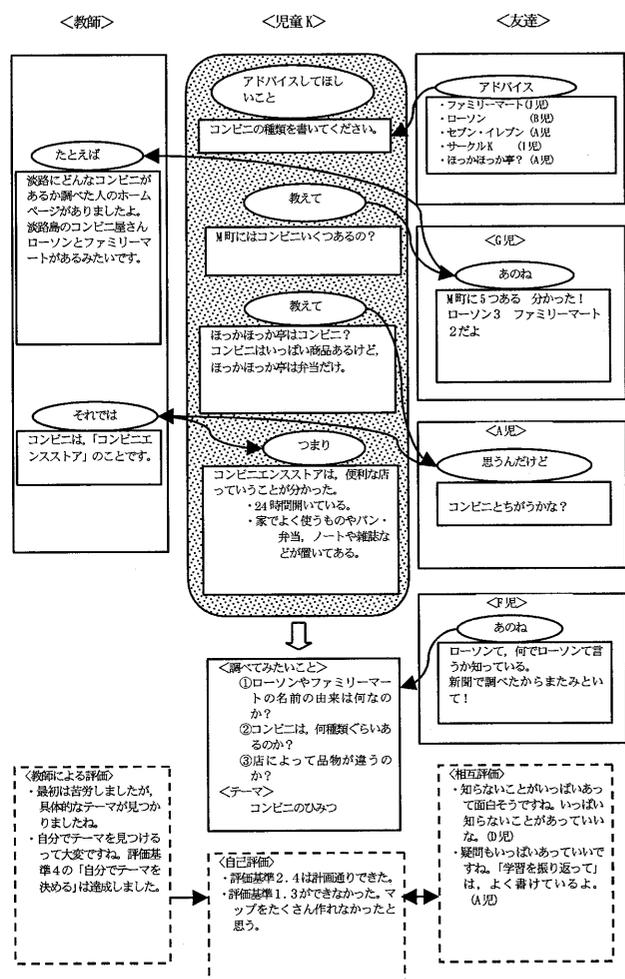


図8-2 問題設定の段階での K 児のコミュニケーション

### 8. 2 D児の学習活動

5年生 D 児は、「人形浄瑠璃で演じられる題について」というテーマで学習を進めた。D 児は人形浄瑠璃の見学後、人形浄瑠璃で演じられている話に興味を持った。太夫の語りは、児童には難解で話

の内容が分からなかったからである。D 児は調べる題目を何にするか迷っていたので、M 郡史や人形浄瑠璃の本を教師から紹介した。D 児は、「傾城阿波鳴門順礼歌の段」と「日高川入相花王わたし場の段」を調べることにした。

児童には難解な人形浄瑠璃の語りをまとめ、発表していた。発表後に他の児童から発表に関して、図8-3に示すような評価が記されていた。

- ・ 発表前にもっと練習したほうが良いと思う。(H 児)
- ・ 「何やったけ、何て読むん？」とかがあったので前に調べておけばよかったと思う。(K 児)

図8-3 D 児の学習ファイル (相互評価)

D 児は、「つまったり、漢字がわからなかったりしたので直したい。」と自己評価の欄に記していた。D 児は、「発表の時に緊張してしまった。」と話していた。自分の学習を発展させるという観点からすると、D 児は色々な調査方法を自分で考えることができなかった。

表8-1は、D 児の評価規準と評価基準表である。D 児は、評価基準表にもとづいて次のように自己評価している。問題設定の学習段階では、「基準4までできた。」と自己評価していたが、集めた資料は、インターネットから検索したものが主であった。

計画追究の学習段階では、「基準4の計画を見直すというのが一番難しかった。」「今度は完璧な計画をつくりたい。」「今度基準に返答内容を予想するということを基準に入れたい。」と書いているように、今回の学習を反省し、次回の総合的な学習の時間への意欲や目標を記していた。

まとめの学習段階では、「基準4までできた。」と自己評価しているが、友達からの相互評価による指摘から、「つまったり漢字がわからなかったりしたので直したい。」と自己評価していた。

表8-1 D 児の評価規準と評価基準表

学習段階		
問題設定	評価規準	前もって資料を集めてテーマを設定する
	評価基準4	前もって資料を集めてテーマを設定する 〔集めた資料〕
	評価基準3	調べたいことにかんするマップを書く 〔マップをかいたかみ〕
	評価基準2	調べたい理由を考えて整理 〔理由を書いた紙〕
	評価基準1	調べたいことを3つぐらい見つける 〔調べたいことをかいたメモ〕
計画追究	評価規準	計画を見直したりして最後までやる
	評価基準4	計画を見直したりして最後までやる 〔計画を見直したメモ〕
	評価基準3	しらべかたを選んで計画 〔インターネット、本、インタビュー〕
	評価基準2	調べ方をいっぱい考える 〔インターネットや本、インタビュー〕
	評価基準1	目的を決める 〔目的を書いた紙〕
まとめ	評価規準	写真・資料を見せながら発表する。
	評価基準4	写真・資料をみせながら発表する。 〔発表のメモ〕
	評価基準3	練習をする。 〔1回練習をした〕
	評価基準2	考えたことや事実などをまとめる。 〔画用紙に写真や芝居のあらすじ〕
	評価基準1	集めた資料から選ぶ(考える)。 〔集めた資料から選んだもの〕

表8-2は、D児の学習ファイルへの書き込み（評価部分）である。他の児童から評価やアドバイスがあったが、自分から学習を改善・修正する行動には結びつかなかった。D児はインターネットのみで調べようとしていたので、教師から、人形座の人に話を聞いてみることをアドバイスし、人形浄瑠璃に関する本を紹介した。

表8-2 D児の学習ファイルへの書き込み（評価部分）

問題設定	自己評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基準1がよくてできたと思う</li> <li>・基準4までできた</li> <li>・テーマを設定するのが難しかった。</li> <li>・資料を集めた</li> </ul>
	友達からのアドバイスや相互評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もっと、人形のことを調べたらいいと思う。(A児)</li> <li>・いろいろな方法で調べたらいいと思う。(H児)</li> </ul>
	教師から	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人形浄瑠璃って。歴史が古くて、有名なよ。</li> <li>・インターネットで資料を集めていましたね。本も探してみるといいよ。</li> <li>・M郡史なんかにも詳しくでてるけど。ちょっと難しいかな。</li> <li>・読みやすい人形浄瑠璃の本があるよ</li> </ul>
計画追究	自己評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全部できたと思う。</li> <li>・基準4の計画を見直すというのが一番難しかった。今度は完璧な計画をつくりたい。</li> <li>・基準2のインターネットを使うが一番よくてできた。</li> <li>・今度基準に返答内容を予想するということを基準に入れたい。</li> </ul>
	友達からのアドバイスや相互評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もっと詳しく計画して書いたらいいと思う。(A児)</li> </ul>
	教師から	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昔は、今のようにテレビや映画はなかったので、村の人たちのいい娯楽だったのかもしれないね。</li> <li>・日高川入相花王（ひだかがわいりあいざくら）は、安珍（あんちん）、清姫（きよひめ）のお話ですね。傾城阿波鳴門（けいせいあわなると）は、親子と名乗りあえない母親と巡礼の少女の悲しい物語。</li> </ul>
まとめ	自己評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・つまったり漢字がわからなかったりしたので直したい。でも自分でふりがなを打ったりしたのでがんばったと思った。</li> <li>・基準4までできた。</li> </ul>
	友達からのアドバイスや相互評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表前にもっと練習したほうがいいと思う。(H児)</li> <li>・何やったけ、何て読むん？とかがあったので前に調べておけばよかったと思う。(K児)</li> <li>・みんなの方を向いて発表したらよかった。(I児)</li> </ul>
	教師から	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表は資料を読むだけでなく、自分の言葉でまとめて発表するほうがいいね。</li> </ul>

図8-4にD児の学習過程のコミュニケーションを示す。D児にとって、難しいテーマを設定してしまった。調べる方法もインターネットを利用する以外には思い浮かばなかったようであった。D児のコミュニケーションをみると、他の児童や教師からのアドバイスが中心になってしまっている。

児童が、その後の活動をどのように進めていくかを考える場合に、どんなテーマを設定するかが非常に重要である。教師の支援として、その児童の性格や特徴を把握し、テーマ設定の支援をする必要がある。また、児童が評価規準を設定するためには、他の児童と自分を比べ、児童自身の成長のために学習に取り入れたいことを見つけることができなければならない。評価基準表の設定には、学習をどのようにすすめていくのかという見通しをしっかりと児童自身が持つておくことが重要である。

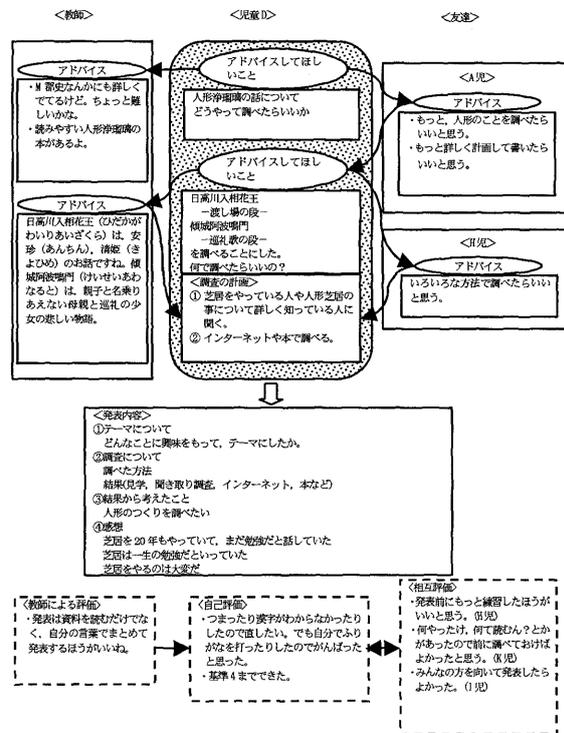


図8-4 D児のコミュニケーション

## 9 まとめと今後の課題

児童が創出した評価基準表に照らして自らの学習を振り返る場合、学習支援システムを使うことで自己評価や児童同士の相互評価が促された。また、評価基準表は、学習過程で次にすることは何かを児童に考えさせ、主体的に自らの学習を発展させるのに役立った。

実践校の児童は評価基準表の創出の経験はなく初めてであることを考慮し、教師がオリエンテーションで例を示したり、評価規準の素案となるものを、学級の話し合いの中で分類していった。そのため、児童が作成した評価基準表は似たものとなってしまった。評価基準表の創出の経験を積み重ねることで、評価規準や評価基準表の素案作りも児童自身ができるようになっていく。

今後の課題を以下にあげる。

第一は、児童が適切な問題設定ができることである。児童が評価規準の達成に向けて基準を段階別に設定する場合、自らの学習をどのように進めていくのかという見通しを持ち、最後まで興味関心を持って追究できることが重要である。児童が適切な問題設定ができるように、教師は児童の性格や特徴を十分把握し、支援をしなければならない。

第二は、他の児童と自分を比較し、違いを見抜く力を持つことである。児童が自らの学習を振り返って改善・修正するためには、他の児童と比較し、自分の学習で欠けている点や他の児童と違う点に気づく力を持つ必要がある。本実践では、問題設定・計画追究・まとめの学習段階で各児童がテーマや調査方法などを発表し、考えを出し合い検討する場を設けた。しかし、検討する場を設けたからといって、すぐに身につく力ではない。繰り返し学習し、他の児童や教師から影響を受けながら獲得していく力である。

第三は、相互評価や教師による評価から、自分を見つめることである。他者からの評価である相互評価や教師による評価を受け、他者の視点から自分を見つめることで、自分の行動や考えを見直し、改善・修正していくことができる。今回の授業実践では、相互評価を生かした学習の改善や修正を十分に見ることはできなかった。今回は、児童一人一人が違ったテーマを設定したため、相互評価やアドバイスが深まらなかったからであると考えられる。しかし、学習情報を蓄積した学習ファイルを学級に公開することによって、他の児童の学習状況を閲覧し自分の学習と比べたり、よいところを取り入れたりする児童もいた。

評価規準と評価基準表を児童が創出することは、無理であると思われがちである。それは、教師による多くの支援が必要であることや児童の能力を考えてのことである。生きる力を育むために重要視される総合的な学習の時間だからこそ、児童が創出する評価規準や評価基準表は重要である。児童創出評価基準表にもとづく自己評価、他の児童による相互評価を組み入れた授業は、児童の生涯にわたって学び続ける意欲の高揚や自ら考え、主体的に判断し、行動する児童の育成のために必要である。